

# 雑草を抑えて収量も安定 秋まき小麦有機栽培のコツ

## 概要 Abstract

パン用途が多い有機栽培小麦は生産拡大が期待されています。そこで、秋まき小麦の安定生産（越冬性向上、収量増加、雑草抑制）技術を開発しました。

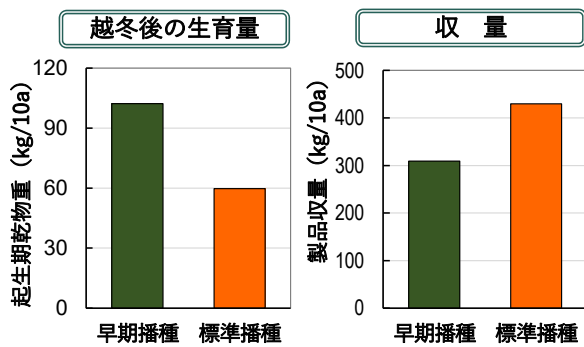


収穫期の小麦とシロクローバ

## 成果 Results

### 播種時期と越冬性・収量

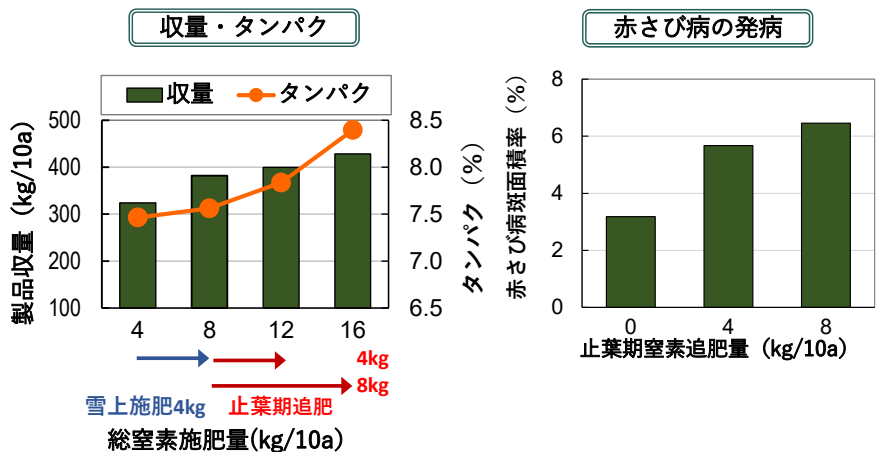
「きたほなみ」の早期播種は越冬性に優れますが、標準播種の方が収量は多くなります。



早期播種：8月下旬～9月上旬  
標準播種：9月中旬

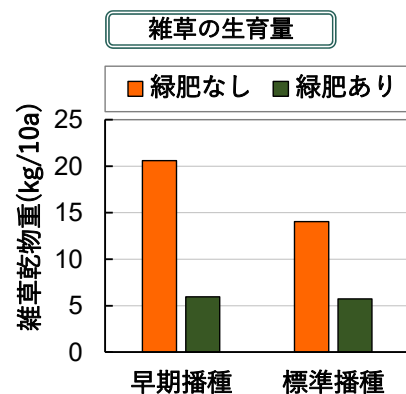
### 施肥量と収量・タンパク・病害

3月中旬の雪上施肥や止葉期の追肥により、収量やタンパクを改善できます。ただし、窒素追肥量が多くなると赤さび病は増加します。



### 間作緑肥の効果

間作緑肥のシロクローバは、雑草を大幅に抑制できます。



### 成果のまとめ

以下の技術を有機栽培秋まき小麦の安定生産に活用してください。

項目	推奨する技術	備考
品種	きたほなみ ゆめちから	・「きたほなみ」の方が安定多収 ・「ゆめちから」の方が高タンパク
播種時期	8月下旬～9月中旬	・収量性優先：標準播種(9月中旬) ・越冬性優先：早期播種(8月下～9月上旬)
播種量	標準播種：255粒/m <sup>2</sup> 早期播種：340粒/m <sup>2</sup>	・255粒/m <sup>2</sup> =約10kg/10a ・340粒/m <sup>2</sup> =約13kg/10a ※1000粒重が38gの場合
窒素施肥	基肥 4 雪上(3月中旬) 4 止葉期(5月下旬)4～8 合計 12～16 kg/10a	・次の場合は総窒素施肥量16kg/10aを推奨 ①地力が低い圃場(熱抽窒素0～3mg/100g) ②「ゆめちから」を栽培 ③タンパク向上を目指す場合 ・過剰な追肥は赤さび病発病を助長
間作緑肥	シロクローバ0.3kg/10a 小麦と同時播種	・雑草抑制に効果的 ・ただし、増収効果がない場合もある

## 普及 Dissemination

- 本試験は雪腐大粒菌核病の発病がない圃場で行われました。
- 早期播種はコムギ縞萎縮病の発病を助長する恐れがあるので、発生地域では品種に留意してください。

## 連絡先 Contact

中央農業試験場  
農業環境部 生産技術グループ  
0123-89-2001  
central-agri@hro.or.jp